

文化資産のデジタルアーカイブが拓く、新たな創造への道

デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブ
推進協議会広報誌
2005/No.26
<http://www.jdaa.gr.jp>

春



CONTENTS

地域活性化への軌跡——新潟県村上市
「新潟デジタルアーカイブ シンポジウム」より

「ハコダテ・丸ごと・デジタル化計画」
地域デジタルアーカイブ推進フォーラム
「Hakodadigital 2004」より

JDAA

新潟デジタルアーカイブ シンポジウム	2
地域DA推進フォーラム「Hakodadigital 2004」(函館)	4
第12回シンポジウム「美術館と画像データベース」	7
デジタルアーカイブ普及セミナー 弘前&八戸	7
「平成16年度 通常総会」開催のご報告	8
「デジタルアーカイブ白書 2005」発売迫る	8
事務局だより	8

地域活性化への軌跡——

新潟県村上市

■第2部 パネルディスカッション
「地域文化とデジタルアーカイブ
—文化の再創造と地域活性—」より

町屋に秘められた魅力

地域文化の再創造を通じて、地域の活性化を図ろうという取り組みが各地で進められています。新潟県北に位置する村上市は、色濃く残された城下町の風情のなかから町屋の魅力に着目し、衰退の一步をたどっていた地域の観光産業に新風を吹き込みました。

「町屋の人形さま巡り」「町屋の屏風まつり」など数々のプロジェクト立ち上げにかかわってきた吉川美貴氏(味匠^{あじな}川取締役)は言います。

「地域の魅力を考えたとき、かつては城跡や武家屋敷ばかりに目が行きがちでした。ただ、全国260カ所の地域を視察するうちに、村上の価値はどうやら町屋にあるのではないかと思いはじめたのです。実際、町屋に一步足を踏み入れてみると、そこには土間や囲炉裏、箱階段などかつての暮らしぶりを物語る空間がそのまま残っていました」

町屋の持つ潜在的魅力を確信した吉川氏は、独自に町屋のマップを制作し10万世帯にこれを配布。すると、それまで町を素通りしていた観光客が徐々に町屋のある通りに戻ってきたそうです。これに手応えを感じた関係者は、次に町屋それぞれに代々伝わる人形に着目、「町屋の人形さま巡り」と名付いたイベントを実施し、無料でこれを公開しました。

地元住民とのふれあい、風情ある建築、珍しい人形を売り文句にしたこのイベントには、第1回目の開催からおよそ3万人もの観光客が詰めかけたと言います。

改修前



改修後



「町屋の外観再生プロジェクト」とは、市民基金を設立し、そこから外観再生への補助金を出すことで徐々に町の景観を整えていこうというもの。写真は、同プロジェクトによる1号店。商店街のアーケードを取り壊すのは、非常に勇気のいることだという

●<http://www.mmmsp.info/>

2005年2

新潟デジタルアーカイブ

2月2日、新潟市内の朱鷺(とき)メッセにて「新潟デジタルアーカイブ」をテーマにしたシンポジウムが、昨年10月26日に発生した新潟中越地震により一時は催に漕ぎつけた同シンポジウム。地域文化再生への道上市のケーススタディを題材としたパネルディスカッション



コーディネーターを務めた
田中カツイ氏

開催経費35万円の町おこし

その後、吉川氏らは「町屋の屏風まつり」を実施。村上を訪れる人は2年目には5万人、3年目には7万人。経済効果も初年度の1億円に続き、3億、5億と飛躍的に増えていったそうです。

「これまでではまず箱ものありきで、それを何年もかけて回収するというのが地域振興の現状でした。でも村上は、あるものを活かすだけに過ぎません。実際イベントの開催経費は、今でも毎年35万円程度です」

このほかにも村上では、昔ながらの町並みを市民の力で復活させようというプロジェクト「黒堀1枚1,000円運動」や「町屋の外観再生プロジェクト(写真)」など、町の景観再生に向けたさまざまな取り組みが進められています。

吉川さんは言います。

「ひと口に景観再生と言っても、ただ和風にすればいいわけではない。あくまでも地域の歴史的考証に基づいて再生を図っていくことが大切です。ないものを持ってきてもダメです。その地に根ざしたものを発掘して磨きをかけ、光を当ててこそ、そこにはじめて魅力が生まれるのです」

地域ムーブメントをデザインする

見過ごされてきた魅力を抽出しリメイクすることで、地域に活力をもたらした村上の事例は、デジタルアーカイブの今後にどういった示唆を投げかけるのでしょうか。当推進協議会の笠羽氏は次のように述べました。

「デジタル情報のデータベースというのは、集積されればされるほど得てして味気ない。蓄積されたものをより魅力的に伝えるには、付随する文脈や背景を踏まえたいうえで、新たな表現として可視化していく必要があります。貯めて、関係性を見出し、

月2日 新潟

イブ シンポジウム

「デジタルアーカイブ シンポジウム」が開催されました。開催が危ぶまれたものの、関係者の尽力により無事開演を探るさまざまな議論のなかから、今回は、新潟県村上市の模様をお届けします。



パネラー4氏。左から順に幸物氏、笠羽氏、吉川氏、加茂氏

可視化する。そうしたトータルな意味でのデザイン力が求められているのではないのでしょうか

地域デジタルアーカイブは、新しい発想と人材の登用とともに少しずつ変容を遂げています。こうした動きを前に、経済産業省の幸物氏は、同省による地域産業振興施策について次のように説明しました。

「まず地域デジタルアーカイブの推進は、公共事業とは別物ということです。今、地域発のムーブメントは『いかに作るか』ではなく『いかに買っていただくか』という方向へシフトしています。先の村上市の事例をお聞きする限り、大切なのはやはり地域の活力をどうビジネス化し、どうプロデュースしていくかなのだと実感しています」

加えて幸物氏は、「たとえば支援がついた時点で停滞してしまうような取り組みに対して、行政は予算をつけづらい」としたうえで、行政支援とは、あくまでも地域主導のムーブメントを後押しするものという認識を改めて示しました。

受け手の期待と情報発信側の責任

会場一体となった今回のシンポジウムでは、パネルディスカッションの合間をぬって、参加者からの質問も相次ぎました。ある参加者からは、「情報化が加速する一方で、デジタルにはどうしても『冷たい』という印象がある。高齢者や子どもなど情報弱者への対応をどう考えればいいのか」という意見が寄せられました。

これを受けた凸版印刷(株)の加茂氏は、数々のデジタルアーカイブ事業に携わった経験から、次のように述べました。

「最近『情報のバリアフリー』という考え方も広まりつつあります。ただ極論すれば、デジタル情報は冷たいものだと割り切っていた方がいいかもしれません。利用者にとっての快適さは、最終的にはそれを運用する人間の手にかかっています。



プログラム

第1部 講演

「デジタル技術の進化とアーカイブの可能性」

講師 加茂竜一(凸版印刷株式会社)

第2部 パネルディスカッション

「地域文化とデジタルアーカイブ—文化の再創造と地域活性」

コーディネーター 田中カツイ(ライブコーディネーター)

パネリスト 笠羽晴夫(デジタルアーカイブ推進協議会 事務局長)

吉川美貴(味匠 越前川取締役)

幸物正晃(経済産業省 関東経済産業局 情報企画係長)

加茂竜一(凸版印刷株式会社)

主催 ■新潟地域文化デジタル化研究会

共催 ■財団法人にいがた産業創造機構、デジタルアーカイブ推進協議会

そして、そこで手を抜いてしまうのが日本の現状。デジタルに対する過度の期待がそうさせるのかもしれない

加茂氏はまた、「デジタルは冷たいものと知ったうえで、情報を人間の体温にまで近づけて伝える努力が必要」と訴え、人間によるそうした行為こそが、情報の再創造に繋がるのではないかと語りました。

その後パネルディスカッションでは、石川や山梨、上田(長野)、函館など、地域特性を活かしたさまざまなデジタルアーカイブ活用への取り組みが紹介されました。事例を通じて「地域が一体なること」の大切さが改めて見直される一方で、パネラー各氏からは「ハイエンドなものだけがアーカイブではない。素人の撮ったビデオ映像がニュース番組で繰り返し放映されるのを見ても、何気ない記録が結果として意味を持つ可能性がある」との声も聞かれました。

当推進協議会の笠羽氏は、被災後の新潟で進む歴史資料保存の動きを紹介し、「お宝だけでなく、残ったものをひと揃いで保存するという姿勢に安心した。災害がきっかけで地域文化に目が向けられるのは皮肉だが、それはそれで大事なこと」と述べました。加えて、かつての神戸がそうであったように、復興のプロセスを定点観測的に記録していくことも地域にとって貴重な財産になると語り、新潟の今後の取り組みに期待を寄せました。

今回、コーディネーターを務めたライブコーディネーターの田中カツイ氏は、締めくくりとして次のように述べています。

「昨今の災害報道を見ていると、受け手である視聴者に対し、情報を編集し発信する側の責任が、いかに重大であるかを実感させられます。現在新潟は、未曾有の災害に直面するなかで、幸いにも雪の下に埋もれていた地域への熱い志を再確認することができました。その想いを、いかにして地域振興に繋げていくのか。それが、地域再生に向けた私たちの使命なのではないでしょうか」

地域デジタルアーカイブ推進フォーラム Hakodadigital 2004

「ハコダテ・丸ごと・デジタル化計画」

2004年11月27日～28日の2日間に渡り、ワークショップ・フォーラム・事例発表の3部構成で繰り広げられた地域デジタルアーカイブ推進フォーラム「Hakodadigital 2004」。

地域文化とデジタルテクノロジーの新しい関係を探る同イベントでは、市民、自治体、研究者それぞれの立場から地域アーカイブへの取り組みが紹介されると同時に、未来の「ハコダテ」を見据えた垣根のない情報交流が図られました。

主催■函館マルチメディア推進協議会、デジタルアーカイブ推進協議会
共催■函館商工会議所、はこだて観光情報学研究会



左は、各種告知ツールやワークショップ使用PCの壁紙など、イベント全般を通じて随所に使用された「Hakodadigital 2004」のビジュアル・アイデンティティ。イベントを視覚的に統一するこうした試みをはじめ、事例発表の場には、専門家だけでなく広く一般市民も登用。また、開催の前後を通じてブログによる情報提供を実施するなど、イベントを一過性のものに終わらせないための工夫が随所に見受けられました。地元有志によるネットワークを駆使した地域活性化への取り組み——今後の展開が注目されます。

●<http://nextdesign.cocolog-nifty.com/hakodadigital/>

11月27日／フォーラム

見過ごされがちな日常の記録

フォーラムでは、デジタルアーカイブを「過去の記録・保存だけでなく、今この瞬間の想いや経験を記録し、未来につなげていく行為」と位置づけたうえで、人と情報のかかわりについて新たな方向性が模索されました。

基調講演を務めた竹村真一氏(京都造形芸術大学教授)は、断片的な経験をネットワークを通じて共有する試み「100万人のキャンドルナイト」を紹介しながら、「携帯は個のメディアとして捉えられがちだが、イベントを通じて参加者は、自分が1人ではないことを実感することができる」と述べ、個の行為を相乗的な流れのなかで見せる情報デザインの可能性を示しました。

次いで、4氏によるトークセッションでは、それぞれが携わる情報メディアと地域デジタルアーカイブの接点について意見が示されました。

東京大学生産技術研究所助手の田中浩也氏は、自身が開発したソフト「PhotoWalker」を用いて、これまで数々のワークショップを開催してきました。田中氏は、「断続的に撮影された写

真を再構成することで生み出された作品も、一種のアーカイブ」と述べ、デジタルアーカイブに、見過ごされがちな日常の記録という新たな可能性を示唆しました。

(株)ユニークアイディ代表の前田邦宏氏は、見えないつながりを視覚化したWebサイト「関心空間」運営の経験から、デジタルアーカイブに求められる公共性について次のように語りました。



トークセッションの様様。左から佐藤氏、田中氏、前田氏、川嶋氏と渡辺氏(コーディネーター)

「地域史料の無償提供を市民に呼びかけるのなら、『社会のため』といった曖昧な説得ではなく、ユーザー自身をもっと『自分のため』と納得できるような動機づけが必要。将来的には、協力者に対し税金控除などの優遇措置を与えるといった具体策も必要ではないでしょうか」

また、仙台市民の知的公共スペース「せんだいメディアテーク」で企画・活動支援室長を務める佐藤泰氏は、地域アーカイブ成立の条件として「地域にとって何が大事で、何がそうではないかを明確化することが第一」と述べ、コミュニティにおける徹底的な討論の必要性を強調しました。



11月28日／「事例発表」より

函館圏地域デジタルアーカイブの構築と創造的アクセス法

川嶋稔夫(公立はこだて未来大学教授)

公立はこだて未来大学では、2003年より学内プロジェクトとして市立函館図書館に収蔵されている江戸末期から昭和にかけての古写真と絵はがき、ざっと5,000点以上ものデジタル化を進めてきました。

はこだて未来大学教授の川嶋稔夫氏は、デジタル化を通じて得た驚きを次のように語っています。

「乾板写真恐るべし、と言ったところでしょうか。オリジナルの絵はがき(ほとんどが写真)をデジタル化して拡大していくと肉眼では見えなかったもの、たとえば市街地を歩く人や看板に書かれた文字など、当時の風俗を物語る細部がいろいろと見えてきます」

現在の写真をはるかにしのぐ高解像度について、川嶋氏は「乾板はフィルムよりもはるかにサイズが大きいので、印画紙に転写されるデータ量も当然大きい」と述べ、大正10年頃に撮影されたダム工事現場の写真(表紙作品)はサイズにして100MB超、7,000×5,000の解像度だと説明しています。

実際、明治から昭和初期にかけての写真はプロの撮影技師によるものがほとんどなので、質・内容ともに非常にレベルが高いといえます。一方、それ以降のものは、写真の社会的意味合いの変化や35mmフィルムの普及などもあって、解像度の低下は否めないそうです。

絵はがきを含めた古写真デジタルアーカイブの今後について、川嶋氏は次のように述べています。

「地元の方はもちろん、観光客のみなさんにも楽しんでいただけるようなかたちで公開していきたい。そのひとつが、観光ガイドブックへの応用です。地域ガイドを情報科学の問題として捉えながら、現在の街並みのなかに過去の史料を盛り込んでいく。つまり、古写真の背景が分かるようなかたちで情報を提供していく必要があります。ゆくゆくは地理情報と絡めたパッチャル・シティマップなどへの応用もあり得ますが、そのため



「高砂町通(駅と大門通より)大火後」(写真上/昭和9年頃撮影)と「函館山から見た市内全景」(明治20年代撮影)。いずれも市立函館図書館蔵

にも今は、基となるデータをしっかりさせておくこと。どういう方針で貯めるかを明確にしておくことが大切だと思っています」



11月28日／特別講演より

「函館の幕末維新開化叢書」と Hakodadigital の可能性

講師／黒田俊光

横浜市在住の会社員・黒田俊光さんは、幕末から明治にかけての函館の歴史を独学で研究し、その成果を個人サイト「函館の幕末維新開化叢書」で公開してきました。

「史料をひとつひとつ見せるだけでなく、レファレンス情報の充実を図りながら、その背景にあったことを一緒に提示していくことが大切。歴史のなかでの位置づけを明確化することで、情報ははじめて価値を持つのだと思います」

一般向けには読み物として歴史を伝えていくことも重要と考えた黒田氏は、時代小説風の特集「大将ペロリ箱館来航」を昨年夏より不定期で連載。ペリーが同地を訪れたときの様子を、さまざまな記録・文献を題材としつつ、ときに独自の解釈を織り交ぜながらスリリングに展開しています。

こうした作業の経験から、黒田氏は次のように述べています。「函館のことは知識としてかなり知り得ましたが、それがそのまま『函館に行きたい』という気持ちに繋がるかというと、そうではない。実際に現場に行ってみたいと思わせるような仕組み・切り口を考えていくことが、今後の課題だと思います」

たとえば、ペリーが通った道や眺めた景色を史料を基に特定しながら地図データの上に落とし込む。それを、リアルな歴史体験ツールとして観光サイト上で展開するなど、デジタルアーカイブを「歴史系サイト」の枠に閉じこめておかないことが重要

だと、黒田氏は語っています。

イベント終了後も黒田氏は、市立函館図書館に保管されている江戸～明治期の「古地図の視点」を活かした観光誘致策として、ブログ上で次のような提言を行っています。

「街全体の雰囲気は、個別の撮影記録や道路地図だけでは伝わらない。現代版の『函館鳥瞰図』のようなものがあれば、そのなかに地域の歴史をマッピングしていくこともできるし、観光エリアマップとして活用することもできます。今の函館の景観を未来に伝えていくには、人の手で描かれた「古地図」の視点に学ぶべき点もあるではないでしょうか」

詳しくは ●<http://nextdesign.cocolog-nifty.com/hakodadigital/>



ホームページ「函館の幕末維新開化叢書」
●<http://www.wsnet.ne.jp/~hakodate/>

クロージングセッション

会場を移しながら、2日間に渡って繰り広げられた「Hakodadigital 2004」。最終日の全プログラム終了後には、参加者全員が膝を交えたかたちでのクロージングセッションが開催されました(写真)。

セッションでは、主催者の函館マルチメディア推進協議会より、講演者や事例発表者はもちろん、イベント開催を影で支えた



方々に広く感謝の意が述べられました。

同時に、今回のイベントを通じて得た「発見」や「疑問点」を、参加者全員がその場で意見交換する「即席グループミーティング」の場が設けられるなど、今回の試みをイベントだけで終わらせず、今後の活動に活かしていこうという姿勢の感じられたイベントでした。

プログラム

11月27日(土)

- ワークショップ(NTT東日本函館支店)
「PhotoWalkerを使った街のアーカイブを作る」
講師／田中浩也
(PhotoWalker開発者／東京大学生産技術研究所助手)
- フォーラム(会場／函館ハーバービューホテル)
基調講演：
「都市の経験を拓くデジタルアーカイブ」
講師／竹村真一(京大造形芸術大学教授)
トークセッション：
「デジタルアーカイブは都市・地域に何をもたらすか」
ゲスト／佐藤 泰(せんだいメディアワーク企画活動支援室長)
田中浩也(東京大学生産技術研究所助手)
前田邦宏(関心空間開発者／(株)ユニークアイディ代表取締役)
川嶋稔夫(公立はこだて未来大学教授)
コーディネーター
渡辺保史(ジャーナリスト／函館マルチメディア推進協議会幹事)

11月28日(日)

- 事例発表・デモ(会場／公立はこだて未来大学)
松原仁／村田貴一／田村昌弘／花海喜和／大久保彰之／松村由紀夫／加藤守甫／玉野智章／加藤元彦／川嶋稔夫／佐藤理夫／奥野進／佐々木康弘／廣池昌弘／板谷淳／田中浩也／前田邦宏(発表順・敬称略)
- 特別講演：
「函館の幕末維新開化叢書」とHakodadigitalの可能性
講師／黒田俊光
- クロージングセッション
モデレーター／渡辺保史(函館マルチメディア推進協議会幹事)

初日フォーラムが開催された「函館ハーバービューホテル」(写真上)と、2日目の会場となった「公立はこだて未来大学」(写真下)



第12回シンポジウム「美術館と画像データベース」 地域文化と次世代観光コンテンツ

2月4日、名古屋市内の名古屋国際会議場・レセプションホールにて第12回シンポジウム「美術館と画像データベース」が開催されました。

万博開催を目前に控えた中部地域は、国際観光都市としてより一層の飛躍を期待されています。「地域文化と次世代観光コンテンツ」と題したシンポジウムでは、産業観光を軸とした今後の地域振興についてさまざまな可能性が検討されました。



プログラム

基調講演：「地域文化のソフトパワー 次世代の観光コンテンツをめぐって」
 武邑光裕 (東京大学大学院新領域創成科学研究科メディア環境学分野 助教授)

特別講演：「産業観光と国際連携」
 須田 寛 (JR東海相談役)

講演：「中部圏における地域文化ミュージアム」
 ～主に白川の世界遺産と万博をめぐって～
 橋本 正 (オークヴィレッジ代表)

シンポジウム：「地域文化における観光コンテンツの方向性」
 モデレーター/武邑 光裕 (東京大学大学院助教授)
 パネリスト/赤崎まき子 (あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会)
 鯨井秀伸 (愛知県美術館主任学芸員)
 斉藤一雅 (総務省自治行政局地域情報政策室室長)
 島田紀彦 (トヨタテクノミュージアム産業技術記念館館長)
 須田 寛 (JR東海相談役)

主 催：地域文化デジタル化推進協議会
 共 催：全国美術館会議

地域から始まる観光立国

経済のグローバル化が進むなかで、日本の観光産業はさまざまな課題に直面しています。全国的な不況に見舞われる国内観光産業とデジタルアーカイブの接点について、基調講演を務めた武邑氏(東京大学大学院助教授)は次のように述べました。

「国際競争力年鑑の格付けによれば、日本の観光価値は48か国中、最下位。一方、草の根的に進む地域情報の発信は、国家という枠組みを越えて今まさしく世界と直結しつつあります。世界に通じるコンテンツを目利きする能力。そしてそれを魅力的に見せる編集力こそが、これからの地域活性化の鍵を握るのではないのでしょうか」

海外への旅行者数と海外からの旅行者数——その入出国比には極端なアンバランスが生じているといいます。この点について特別講演を行ったJR東海相談役の須田氏は、「地域発の情報発信が必要。愛知の例で言えば、産業の集積地として発展してきた歴史そのものが地域の魅力ではないか」と述べ、外国人が日本に対して持つ「産業先進国」というイメージを活かしながら、観光資源としてこれを発信していくことの重要性を示しました。

■シンポジウム「地域文化における観光コンテンツの方向性」より 歴史の裏側を語る観光コンテンツを

観光誘致を目的に全国各地で進む地域情報の発信。シンポジウムでは、観光コンテンツという観点から、中部地区のデジタル情報の中身が検証されました。

愛知県美術館の鯨井氏は、「コンテンツはそのものに関するデータと、それを補う周辺データから成り立っている。大切なのは、そのいずれもを情報化すること」と述べ、情報はインデックス化することではじめて現物の代替機能を果たすとの認識を示しました。

現在、総務省では、映像コンテンツの活用した地域支援策として、全国地域映像コンクールを実施しています。

この点について総務省の斉藤氏は、「肝心なのは、昔ながらの伝統文化への支援のみに留まらないこと」と述べ、次の事例を挙げました。

「高知に端を発した『よさこい』は北海道の『ソーラン節』と融合して『YOSAKOIソーラン祭り』となり、全国的なムーブメントとして広がっています。伝統的な型にとらわれず、新しい価値を生み出していく。次世代のソフトパワーを体現する、そうした斬新なムーブメントに期待したいと思います」

愛知県では、ここ数年、ものづくり文化の発信を通じた地域活性化を進めてきました。こうした活動と愛知万博の接点について、産業観光の牽引者である須田氏(JR東海)は次のように語っています。

「万博というのはもともと産業博。その意味では、地域産業の歴史を世界中にアピールするまたとない機会です。幸いにもこの地には、産業の歴史を集積した美術館、博物館が数多くあります。こうした施設を、万博の場外展示場として機能させることも視野に入れています」

これを受け、あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会の赤崎氏は「ものづくりの歴史とともに、その裏側にある物語をもっと伝えていく必要がある」と述べ、その一手段として、散在した地域情報を総覧できるポータルサイトの必要性を訴えました。



左からモデレーターの武邑氏。次いで赤崎氏、鯨井氏、斉藤氏、島田氏、須田氏

デジタルアーカイブ普及セミナー 弘前&八戸

2004年10月26日(弘前会場)から27日(八戸会場)の2日間に渡り、青森デジタルアーカイブ推進協議会主催による「デジタルアーカイブ普及セミナー」が開催されました。

3回目を迎えた16年度セミナーでは、ユビキタス・コンピューティングによる次世代ネットワーク社会をテーマに、行政と民間それぞれの立場からデジタルアーカイブをめぐる最新動向と展望が示されました。弘前会場には92名、八戸会場には45名が出席。熱心に話に聞き入る参加者の姿に、最新情報収集への意欲と地域振興への熱意とが垣間見られたセミナーでした。

プログラム

第1部：「デジタルコンテンツ産業の推進」
 松下香苗
 (経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課)

第2部：「ICタグ最新動向と今後の展開」
 松下浩一
 (大日本印刷株式会社 ICタグ事業化センター)

主 催：青森デジタルアーカイブ推進協議会
 共 催：デジタルアーカイブ推進協議会

デジタルアーカイブ推進協議会 「平成16年度 通常総会」開催のご報告

2004年6月11日(金)、東京都千代田区の千代田放送会館7階・708号会議室にて、当推進協議会の「平成16年度 通常総会」が開催されました。議事では平成15年度の事業活動が報告、総括されるとともに、平成16年度の事業活動計画案および収支予算案が示され、満場一致で承認可決されました。



最新版：デジタルアーカイブの総合レポート 「デジタルアーカイブ白書 2005」発売迫る

2001年版の発行以来、2003年版、2004年版と版を重ねてきたデジタルアーカイブ白書。その最新版「デジタルアーカイブ白書 2005」は、4月の発行を目指して現在、制作の最終段階を迎えています。

国内デジタルアーカイブの最新動向を網羅した国内唯一の総合レポート「デジタルアーカイブ白書 2005」(2,700円/税込)の発行に、ぜひご期待ください。



事務局だより

今号でレポートしました、新潟と函館に参加しました。

新潟は、10月の実施予定が新潟中越地震の影響で延期となり、2月に開催されました。2月という雪が降る寒い時期でしたが、非常に活発な議論があり、盛況なシンポジウムでした。特に、村上の町おこしについての話では、是非、村上に見に行きたくなる気持ちが出てくる程でした。

函館は、2日間という、大がかりなイベントでした。1日目に行われた、ワークショップ「PhotoWalkerを使った街のアーカイブを作る」。デジカメを持って街に出て、写真を撮り、パソコンの中で撮った写真を一連のストーリーに繋げる。参加者が各自個性豊かな作品を発表し合う。参加してみて体験したことを、個人的にも実行してみようと思いました。2日目の事例発表、3会場で同時に行われ、どれも興味深く、どこに参加するか迷いながらの聴講でした。この函館についてのサイト、ブログとして公開され、開催までの情報だけでなく、開催後も引き続き、追加情報が掲載されています。関係者の熱い意気込みが感じられ、これまでにない新しい取り組みであるといえます。

また、「デジタルアーカイブ白書2005」は、2005年4月発行を目標に鋭意作成中です。もう少しお待ちください。発刊の際はJDAAホームページやメールマガジンにてお知らせします。

●メールマガジンのご案内●

デジタルアーカイブ推進協議会(JDAA)では、普及啓発活動の一環として、メールを使用した情報提供を行っています。

内容としては、JDAAが関係するイベント情報、広報誌等の発行物の案内、JDAAホームページの更新情報、関連団体のイベント案内、等です。発行は、不定期ですが、月1回程度を目標としております。

メール配信をご希望の方は、JDAAホームページからの申し込みが可能です。購読は無料です。

<http://www.jdaa.gr.jp/mail/mail.htm>

デジタルアーカイブにご関心のある方は、是非お申し込みください。

■現会員一覧(平成17年3月現在)

(株)NHKエンタープライズ21/(財)NHKエンジニアリングサービス/
(株)NTTデータ/(株)オーエムシークリエイティブ/岡村印刷工業(株)/
(学)河合塾/大日本印刷(株)/(株)東北新社/鳥取ガス(株)/凸版印刷(株)/ナカシャクリエイティブ(株)/
日本政策投資銀行/日本ビクター(株)/(株)日立製作所/富士通(株)/
早稲田システム開発(株)

16社

石川県/岐阜県/埼玉県/上田市/大垣市/京都市/高遠町

7自治体

地域文化デジタル化推進協議会/
新潟地域文化デジタル化研究会/
(財)文化財保護・芸術研究助成財団/(財)デジタルコンテンツ協会/
青森デジタルアーカイブ推進協議会

5団体

合計：28会員

表紙作品について

「函館・笹流さきながれダムの工事現場」 大正10年頃

撮影者未詳 市立函館図書館蔵

函館水道拡張工事の記録として保存されていた紙焼き写真36枚のうちの1枚(153×199mm)。一張羅を着込んだダムの工事関係者とその家族が並んだ同作品。背景には、トロッコを押す作業者たちの生き生きとした様子が写っている。

デジタルアーカイブ推進協議会のWebサイト <http://www.jdaa.gr.jp/> 最新情報や本誌のバックナンバーがご覧いただけます。

発行所：デジタルアーカイブ推進協議会(略称：JDAA) Japan Digital Archives Association

〒102-0083 千代田区麹町5-7秀和紀尾井町TBRビル815号室 (財)デジタルコンテンツ協会内 TEL:03-3512-3906 FAX:03-3512-3908

発行人：事務局長 笠羽晴夫 編集：事業部会 表紙題字：平山郁夫 表紙作品提供：市立函館図書館

デザイン・印刷：(株)オーエムシークリエイティブ
(本紙記事の無断転載・記載を禁じます)